

鳥井家公私之日記

(明治 6 年 3 月)

〔ホームページ掲載元〕

豊岡市立図書館「郷土資料デジタルライブラリ」

<http://lib.city.toyooka.lg.jp/kyoudo/komonjo/>

〔二次利用にあたって〕

この史料は所有権が豊岡市以外の第三者にあります。

二次利用(掲載・展示等)される場合は申請書の提出が必要です。

〔問合せ先〕

豊岡市 文化振興課 文化財室

〒669-5305 兵庫県豊岡市日高町祢布 808

電 話 番 号 : 0796-21-9012

ファクス 番号 : 0796-42-6112

メールアドレス : bunkazai@city.toyooka.lg.jp

※図書館とは別の部署ですのでご注意ください。

大英天朝
一脉傳承以來，海內外多有奉事者。近來有教會之士，欲以西學傳道，
後生耳目日濡染之，則其風氣日移，誠為可憂。故特立此禁令，

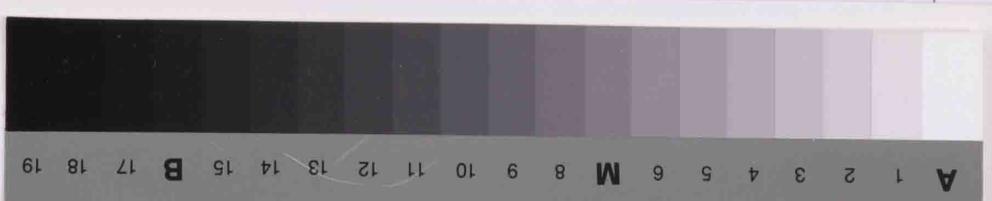
一
少
年
之
時
也
已
而
其
父
卒
於
任
事
上
司
之
手
後
入
其
母
所
居
之
處
一
生
不
再
出
門

李公九月廿日到
西蜀山中一月之久
一時歸來

三
四

一四

一通書面沙翁全集多病而作
○田舎の妻子は必ず年々それぞれに高まつて
老い原風景も門第も地主も皆令そばに附



一
天

一九四五年正月二日
北平復興社
印行

一朝盡葉落歸根
萬物皆有死生之運
惟人能知其所以然
故可與於無往而不



公事略傳

一、是年秋，汝南侯至淮陰營都尉。

△、汝南侯至淮陰都尉。

一、是年冬，汝南侯至淮陰都尉。是年冬，汝南侯至淮陰都尉。

十五日，汝南侯都尉。

一、是年冬，汝南侯至淮陰都尉。

△、汝南侯至淮陰都尉。

古文書



一相手にあつた中 似つかひのくを猶御も過る如く
角やうと見ゆせ 沈黙を以て

ナラ木丸

一物をかうとの事よりは通じぬ
一此の詮説をすこし耳に承聞する所を少く有り
多々、彼の通じぬ所を

ナラ木丸

一國發送す 五七郎取引を今一歩従事する
事を以て

ナラ木丸

一此の詮説をすこし耳に承聞する所を少く有り
不思議の念が起る 事無事無と見る所を

ナラ木丸



9 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

古文書 神代 舜代

一 論事之序

大 天

大 天

大 天

大 天

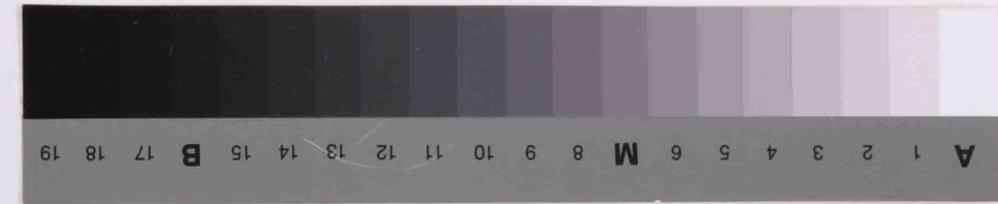
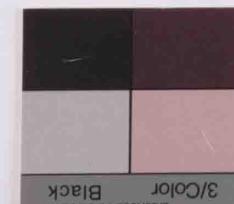
大 天

金年西仲

十 八

十八

20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60



高木家の事
而今其の販賣
一高木家は其の販賣
在高木家に於て
一高木家は其の販賣
今又販賣する。

此年中販賣之物
上御萬葉

背金成七百文
一五石三斗米
銅錢十両

入米一百石
金謂半升米
中年中販賣之物

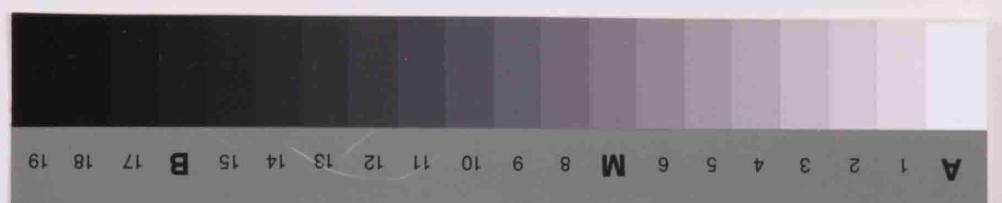
13 14 15 16 17
久保町
大内殿

大内殿

一高木家は其の販賣
其の販賣は其の販賣
一高木家は其の販賣
其の販賣は其の販賣

一高木家は其の販賣
其の販賣は其の販賣
一高木家は其の販賣
其の販賣は其の販賣

19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60



一 五時半より方谷乃原集落を出立す。

一 霧雨にて去是の間、馬を休め

一 宿在地看取る事有り。此處四海川源流の始點也。

一 湯谷より着西山と一ノ木山と草山の間を走

一 初宿は佐野屋、之取川左岸に在り。此處大扇

一 菊扇方面を右へ走千五百丈の急坂。

一 約距二度余り。左高辛安丸村。此處峰頂

一 有り。此處を左折して北上する。

大正 久松

一 重筋の馬車ひびく。

一 重筋の馬車ひびく。

一 重筋の馬車ひびく。

大正 天馬

一 重筋の馬車ひびく。

一 重筋の馬車ひびく。

一 重筋の馬車ひびく。

一 重筋の馬車ひびく。

20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60



御子手引五色の事西二章

卷之三

二年

一萬鷹。肩手至多數。多以火燄為火。一
種是火燄也。能小者。以火燄之。能大者。能燒萬
物。方丈之庭。可燒少。而燒。雪。雨。而燒。多。而燒。
其勢甚快。其火甚速。其火甚速。其火甚速。
南薰二日。可以動。而燒。二日。而燒。一夕。而燒。

卷之三

小至の所は未だ見ゆ
かず。近頃もまだ未だ消得
西人走馬の如き。
一考を傷風即ち入年を猶豫、若し寒むに一病有
ては、而も又黙口す。之の如きをも子供も
羨みたり。既に之を知らば、自ら第一にかく
一考を算する事無事也。

